

Spring Seminar 2017

5thC++11 番テーブル総評

Judge：藤原（芝浦 4 年）

*Participants:*伊集院(法市3)、成田(上智3)、小林(青学3)、西村(青学2)、

宮本(青学2)、竹林(慶應2)

*総評の内容についてジャッジと参加者の間に多少のずれが生じている部分があるかもしれないが、ジャッジをする性質上許してもらいたい。

全体の流れ

オピメとして伊集院が選ばれて検証が始まり、Practicability の議論の途中で終了した。終盤以外基本的に雰囲気はよかった。

議論の流れ

<Narrowing>

オピメに西村、成田、伊集院、宮本の 4 人が立候補した。全員トピックは O/T で Mandate は脳死患者を強制的にドナーにするものであった。まず、立候補者以外で Vote したものの割れてしまい決められず、小林の「自分以外のアイデアに Vote して決めよう」という発言が通るものの再度割れてしまい決められず最終的には宮本が Vote 権を放棄したことによりオピメとして伊集院が選ばれた。(40 分)

<A.S.Q>

伊集院のオピニオンに対し全員が積極的に Q をしてアイデアを聞き出した。Q,A 共に基本的なものでありそこまで時間はかからなかった。

<NFC>

アイデアは宮本の B/D/F の家族は B/D の生活を守らなければならないというもののみにて、T/Conce したいというものであった。宮本は 1.Q, 2.obj, 3.ccl という簡易な proce を引きそれに則って検証がスタートした。まず、伊集院がステップ2はいらないとした反論をするも通らなかった。次に成田がなぜ今コンセを取りたいのかと Q をするも伊集院が今取ることを認めているため有効打にはならなかった。その後、伊集院、成田、小林によりどこをコンセとしたいのかが明確になり伊集院が「この T/Conce に対しもし反論があればマンドートで受け付ける」という発言をしたことで最終的にコンセとなった。(30分)

< Practicability >

プラカでは竹林がマンドートは B/D の選択権を侵害するものであり憲法違反であるというアイデアを提示した。主に伊集院と小林の Q により竹林のアイデアを明確にしていく。その後、伊集院の「私の経験上エクセプションは時にコンフュージョンを引き起こすから、まずロジックを切る方向で進めてみて難しかったらエクセプションを出そう」という発言のもと彼女がその旨の proce を引き、それに則って議論された。まず、竹林は A/C だとどうして×Practicability なのかという点を「日本政府が法律を作る前に裁判所が違憲かどうか判断し違憲であれば作れないため」と説明した。その後質問が飛び交うも有効な情報などは得られず小林、伊集院がタスク流しを試みるも収束には至らなかった。そこで小林が竹林に a/l/1 の否定もしくはなぜタスク流しでは流れないのかを聞き出そうとしたが他の介入により話されることはなかった。次に竹林は今コンパリしようという発言をするも通らず残り時間が 20 分を切ったところで伊集院がエクセプションを見つける方向に話を進めた。その後、伊集院の Q によりどれがエクセプションになりうるのかを引き出し、それを受けた小林が construction を用いたエクセプションを

出すも竹林はこれを認めなかった。それを受け伊集院がエクセプションかどうかの J/C は regulation でありこれはコンセである。よってこのエクセプションはダイレクトであると反論するが通らず、再度小林が実話を元に反論を行うも浸透しなかった。伊集院がなんとか get AD するためにコンパリで話そうという発言をするが通らず、時間になったのでここで議論は終了した(1h)

<コメント>

1. タイマネ意識

今回は主にオピメ決め、NFC、Practicability に時間を費やしていたがオピメ決め及び NFC はかかりすぎている印象があった。オピメ決めは今回投票権を持つものが偶数ということもあり仕方のない部分もあるが、例えば投票前の質問に時間を設定していながらもそれ以上割いていたのは時間の無駄であった。そもそも4人も立候補がいるのであれば、ただでさえ時間がかかるのだから全員が無駄な質問はしないようにする意識を持つことが大事である。また、リポートになった際にどのように対処するかを予め考えておくといいと思う。また、ハンドリングなどが得意であればあえてオピメを辞退して自分に都合のいいオピメを選び議論に時間を費やすほうが有効である。そして NFC がこちらはコンセを取りたいだけでありかつ特異なアイデアでもないわけですのでに時間がないのもわかっていただけたから必要最低限な確認のみをして、さっさとコンセをとって次に進めたほうがよかったであろう。このように今回のテーブルではかけるべきでないところに時間をかけすぎている節があったので各自タイマネ意識を持つとともに重要なところに時間を割くよう心がけると良いだろう。

2、obj に対するアプローチ

Practicability のアイデア自体はよく見るものであったが今回流せなかったのはなぜだろうか。今回基本的に皆タスクを用いて処理を試みていたがアイデアプレゼンターはこれを認めなかった。それはなぜなのか。今回このなぜ？という問いかけがしっかりと行われなかったために議論が停滞した。相手がタスクでは流れないと言っているのにその理由も聞かずにタスクで流そうとしても流れることはないだろう。どの obj に対し

とも言えることだが流れなかったなどのときは必ずなんで流れないのか理由を確認すべきである。そうしなければ結局何が clash しているのかわからないため解決できないだろう。このような時こそ QC を用いて議論の焦点を明確にすべきである。また、一つの方法にこだわらず別のアプローチを試みるのも大切である。タスク流しは確かに便利だがそれ以外のアプローチをして(最終的にはタスクを用いるとは思う)流すなどすると良いだろう。ディスカッションは生き物のようなものなので絶対の方法はなく、通じる時もあれば通じないときもあるだろうから一つの方法に固執せずいくつも処理方法を持つようにプレパしておくといいであろう。大事なことは相手の言い分を聞いた上で反論の余地のない処理をすることである。エクセプションも同じようになんで認めないのかを丁寧に確認していくべきであった。また、今回のアイディアは R/J/G に基づくものであったがなぜ基づかなければならないのか？や、そもそもこのディスでの唯一のルールはナローでありナローでは t/p or not はコンパリに基づくと言っていたわけだからそこを使って反論するという方法もあったのではないだろうか。

<順位と選定理由>

1 位 伊集院(法市3)

オピメとしての役割を果たし、どの話も彼女が中心となって議論を進めまた収束させていた点を評価して1位とした。このテーブルでは唯一推進力のある人物であったと言える。彼女の存在は大きく彼女の貢献なしでは議論が進まなかったところも多く、実際2位とは大きく点数差をつけている。しかし、反論へのアプローチの仕方などまだまだ改善できるところがあるので今後はそこを改善しアッセンでは目標に到達できるようにプレパして欲しい。

2位 小林(青学3)

随所での的確な発言があったものの浸透しなかったためにその話がされることがなかった。なのでこの順位となった。彼の発言が浸透し実際に話が進められていたら

Practicability など解決できた箇所もあったと考えられるので非常に惜しかった。今後は議論を自分自身で進められるようにハンドリング技術を磨くと良いだろう。アッセンでは議論を引っ張れるようになっていて欲しい。

3から6位に関してはほぼ点差はなく Q 一個で順位は変わっていた

3位 竹林(慶應2)

このテーブルに置いて唯一検証されたのが彼女の話であったのでこの順位となった。しかし、Practicability において議論の停滞を起こしてしまったのは反省点である。この停滞は竹林のみではなくテーブルメンバー全員のせいでもあるが、少なくともなんでタスク流しを認めないのかなどはしっかりと説明すべきであった。今回自分の中にしっかりとした意見があるように見えたので今後はそれを相手に伝えられるようにプレパすると良いだろう。アッセンでの成長に期待している。

4位 宮本(青学2)

積極的な Q や C を評価してこの順位となった。タスクなどの理解はしっかりできていたが、それを用いて相手を説得するには理由付けが弱いと感じられたので今後は説得力のある理由をしっかりと述べられるようにして欲しい。ここでは話せないではなくなんで話せないのかを言えるようにすると良いだろう。アッセンでの成長に期待している。

5位 成田(上智3)

Qなどの発言数自体は多かったものの評価できるものが少なかったなのでこの順位となった。厳しいことを言うようだが今回無駄Qが多く、時間を使いすぎているように感じられた。おそらくこれはパンツも感じていたことと思う。無駄Qは時間の浪費及びパンツから反感を買うなど百害あって一利なしだと思うので減らすと良いだろう。基本的なこととはできると思うので今後は必要なQとそうでないQを分け、必要なQを増やすようにすると良いだろう。アッセンでのリベンジに期待している。

6位 西村(青学2)

介入が限定的であったことやCが自分のためのCであったことからこの順位となった。ASQでは介入していたのにNFC以降介入がほとんど見られなくなってしまったのは残念であった。アッセンでは最後まで介入を続けて欲しい。

<最後に>

結果はともあれ長い期間皆さんお疲れ様でした。随分と偉そうな物言いですいません。この総評が皆さんの糧になれば幸いです。おそらく全員が自分のいたかったテーブルではなかったと思います。去年私もそうでした。今回の春セミを通して各々自分の課題が見つかったと思うので今回の悔しさを忘れず残りのプレパで改善してアッセンで是非リベンジしてください！特に3年生は次のアッセンが泣いても笑っても最後のランクのかかった大会なので悔いの残らないよう残りの期間全力でプレパしてください。一回一回のテーブルはたいしたことのないように思えるかもしれないけど、その積み重ねは思った以上に大きいのでどんなテーブルでも大切に、今できる最高のパフォーマンスをするように心がけ価値のあるものにしてください。残りの日々をどう過ごすかでアッセンの結果は変わります。奇跡は起こるものではなく起こすもので努力次第で可能だと思います。春セミでランクをとった人を抜くことも十分可能だと思うので最後まで諦めないでください。応援しています。